

平成17年度受賞パンフレット



—都市と農山漁村の共生・対流表彰事業—

# 第3回 オーライ!ニッポン大賞



南部町農業体験修学旅行

## 第3回 オーライ!ニッポン大賞

本表彰事業は、今年度で第3回目となりました。今年も北海道から沖縄まで全国各地から143件（オーライ!ニッポン大賞122件、ライフスタイル賞21件）の応募がありました。

全体としては、都市住民の受入活動などにおいて、長年の実績や豊かな発想力を持って積極的に展開している農山漁村側からの応募に加え、都市と農山漁村の共生・対流を都市側から農山漁村側へ積極的に働きかける活動や環境保全を目的とした活動が地域の活性化に繋がっている事例、また橋渡しの役割を担うNPOや関係機関からの応募も見られ、都市と農山漁村の共生・対流の取組みの輪が着実に広がり、各地域で活発に推進されているという手ごたえを感じました。

審査委員会における審査基準（\*）は7項目で、これをもとに各委員が熱心に議論を行い、特に「都市と農山漁村との行き来が活発であること」「活動の内容が幅広く、地域内外に刺激や影響を与えていること」「都市と農山漁村が互いに元気になるような取組みであること」「活動の内容が他地域のモデルになるような取組みであること」「長年にわたり活動が継続していること」などという点を重視して各賞を選定しました。

全体としてどの取組みも優れたものであり、オーライ!ニッポン大賞6件、審査委員長賞を6件選定する際には、各委員からの活発な意見が交わされ、受賞地区を絞り込むことは大変な作業でした。結果的には、受入れ側（農村側）の取組みである南部町（旧 名川町）が、近隣町村と連携をしながら広域的に受入体制整備を行い地域の活性化が図られている点と、日本のグリーン・ツーリズムの先駆的存在としての長年の実績が高く評価され、今年度のグランプリに選ばれました。

この他、惜しくもグランプリには届かなかったまでも、「地域HACCP（ハサップ）」の取組みを活かし、オリジナル性高い体験メニューを開発・提供している「標津町エコ・ツーリズム交流推進協議会（北海道標津町）」、緑のふるさと協力隊の派遣事業を通じて、地域の活性化に貢献している「特定非営利活動法人 地球緑化センター（東京都中央区）」、また地域の当たり前であった物の見方を変えて発想豊かに活動する「特定非営利活動法人 NPO砂浜美術館（高知県大方町）」など、いずれも他の参考となる優れた取組みを展開しており、高い評価を得ました。受賞団体の取組みは、今後の都市と農山漁村の共生・対流促進のモデルとなるとともに、今後一層の発展が期待されます。

### （\*）オーライ!ニッポン大賞 審査基準

- ア 農山漁村地域を舞台とした新たなライフスタイルの提案、普及に関する取組みであること。
- イ 地域の個性を生かした取組みであること。
- ウ 農山漁村地域を活性化する効果があること。
- エ 都市側、農山漁村側双方の住民の参加を促進する取組みであること。
- オ 長期的な取組みの実績があること。
- カ 効果が持続して発現すると見込まれること。
- キ 他の地域における応用性に富んでいること。

# オーライ！ニッポン大賞 グランプリ

なんぶちよう      ながわまち  
南部町(旧名川町)

内閣総理大臣賞

あomoriken なんぶちよう  
青森県 南部町



上 / キク収穫体験 下 / 農業体験修学旅行

## 講評

南部町名川地区のグリーン・ツーリズム活動の原点は、その言葉や概念さえ存在していなかった昭和61年に、県内一の栽培面積及び収穫を誇っていた「さくらんぼ」を地域振興の起爆剤にと実施した「さくらんぼ狩り」のイベントから始まっている。このことが農家と消費者の繋がりを生み、交流の輪が町内外に広がっていく中で、「名川型交流」という農業体験、郷土料理、地域文化を生かした交流形態を確立。平成3年度に交流の拠点施設としてオープンした農産物直売施設「名川チェリーセンター」は、平成16年度には2億9千万円の売上額となっている。また平成5年度から実施している首都圏の農業体験修学旅行の受入れは、平成8年度に近隣4町と「三戸地区観光振興協議会」を設立することで大規模校の修学旅行の対応を可能にするなど、受入体制の強化を図り、当時は1校（38人）だったのが、平成16年度は8校（旧名川町で561人）と増加している。

平成15年度からは、通年農業観光への誘客を図るために、東北新幹線八戸駅開業に合わせ、八戸・名川間無料シャトルバスの運行を行うなど、積極的に交流事業を展開している。さらに平成16年10月には、青森県との連携のもと、首都圏の中高年層と地元のコミュニケーションを楽しんでもらうモデル事業として、バーチャルビレッジ達者村を開村し活動している。また、平成17年度からは東京の大手人材派遣会社が進める「農業インターンプロジェクト」の研修（9名）を受け入れるなど、いち早く農業体験を中心とした交流事業に着目し、活動実績20年を経てもなお、近隣町村と協力体制を取りながら積極的に取り組んでいる点が高く評価された。

南部町ホームページ <http://www.nanbu.net.pref.aomori.jp>

# オーライ！ニッポン大賞

しべつちょう

## 標津町エコ・ツーリズム交流推進協議会

こうりゅうすいしんきょうぎかい

ほっかいどう しべつちょう  
北海道 標津町



標津漁港での秋鮭の荷揚げ見学

### 講評

世界自然遺産に登録された知床半島の玄関口に位置し、国内屈指の漁獲を誇る秋鮭やホタテ貝を主力とする漁業とこれらを原料とする水産加工業、そして広大な牧草地を活用した約2万頭規模の酪農による「生産の町」としての特徴を生かし、標津版エコ・ツーリズム事業を展開している。

特に標津町では、国内で初めて漁獲・市場・加工・流通までを高度な衛生管理において地域で一貫して行う、食品供給システム「地域HACCP（ハサップ）」を導入し、このシステムを学習の場に活用している。

また、全国で初めて実施した知床の大自然の中での忠類川サーモンフィッシングや、イクラ作り、貝剥き体験に加え、最近では広大な牧草地帯での大型酪農体験コース（ファームステイ）を体験メニューとして加えるなど、地域の自然、産業、生活、食そして遊びなどの地域の資源を生かした、特色ある体験メニューを積極的に開発している。

また、地域の各分野の名人が事前に講習などを受けて、地域ボランティアガイド（85名）となって受入れを行っており、平成17年度は首都圏、近畿圏などの小学校から高校生まで13校1,400人泊を受け入れている。

このように、地域の資源を最大限に生かすとともに、シルバー世代が受入側として活躍するなど、地域をあげた取組みを行っている点が評価された。

標津町エコ・ツーリズム交流推進協議会

<http://www.shibetsu.net/eco-tourism/>

# オーライ！ニッポン大賞

とくていひえいりかつどうほうじん ちきゅうりょっか  
特定非営利活動法人 地球緑化センター

とうきょうと ちゅうおうく  
東京都 中央区



ほだ木を運ぶ（愛知県豊田市）

## 講評

地球緑化センターは、平成5年の設立以来、個人、行政、企業、学校など様々な人を対象に「緑のボランティア」を育成し、その活動を応援する取組みを行っている。平成6年からは、緑の村おこしを進める市町村に1年間隊員を派遣し、農林業活動や役場の補助的業務をはじめ、受入市町村の村おこし活動やその地域での生活を積み重ねることで、自己の生き方を見つめる機会を提供する「緑のふるさと協力隊」の取組みを実施しており、派遣する隊員の募集、派遣先の選定、派遣終了後の活動報告までサポートしている。特に派遣された隊員が地域に溶け込むために派遣期間中は24時間交代で、隊員からの相談をセンターの職員が受け付けるとともに、派遣された市町村にも訪れ、隊員に的確なアドバイスを行うなどの手厚いサポート体制をとっており、これが1年間の長期派遣にもかかわらず、途中で辞退する隊員がほとんどなく、その後の定住につながる割合を高くしている。

参加者の平均年齢は25歳（平成17年度）で若い世代に働くことの意義を知ってもらうことで、農林業の担い手の確保だけでなく、ニート対策にも繋がっている。

11年間の取組みで30市町村に277名を派遣し、そのうち94名が派遣先に定住し、その定住率は34%にのぼっている。また、定住までには至らなくとも派遣された隊員が中心になり、地域で新たな事業展開に参加したり、地元の人々の気がつかない山村の魅力を発見して情報発信を行うなど、このように都市と農山村の橋渡しを行っている活動が地域の活力と活性化に貢献している点が評価された。

特定非営利活動法人地球緑化センター <http://www.kk.ij4u.or.jp/gec/>

# オーライ！ニッポン大賞

えちご いなか たいけん すいしん きょうぎかい  
越後田舎体験推進協議会

にいがたけん こういぶ  
新潟県 (広域)



わらぞりづくり体験

## 講評

新潟県の南西部に位置する東頸城地域は、ブナの原生林が広がり、全国各地で姿を消しつつある棚田やかやぶき屋根の民家が数多く残っている。しかし一年中の3分の1は雪に閉ざされる厳しい自然条件に加え、過疎化や高齢化の波が押し寄せるなど様々な問題を抱える中で、今後「観光」で生き残るための戦略として、これまでのスキー場と温泉施設という観光から「体験型観光」にシフトしようと、平成10年に旧東頸城郡6町村の宿泊体験施設、地域の人々、行政がお互いに協力・連携し、「体験」への共通理解のもとに、「豊かな心」や「生きる力」を育むプログラムを提案し、修学旅行や体験旅行の受け入れ活動を行っている。

越後田舎体験は、自然体験、農林業体験、農村生活体験、食体験、工芸体験、雪国体験、スポーツ体験など、参加者の希望や季節に合わせて80以上のプログラムから選択できるようになっており、その体験のフィールドは棚田を始めとする生産の現場そのものを活用し、地元の生産者がインストラクターとなり受け入れを行うなど、本物の体験の提供に努力している。このように、「日本の田舎の原風景」とそこに生きる人の生き様を魅力的な資源として着目し、同じような問題を抱える中山間地域が広域に連携して地域の活性化に取り組んでいる点が評価された。

# オーライ！ニッポン大賞

とくていひえいりかつどうほうじん  
特定非営利活動法人

きた

北はりま

でんえんくうかんはくぶつかん

田園空間博物館

ひょうごけん にしわざし  
兵庫県 西脇市



桜吹雪の中 日本一長い散歩道

## 講評

兵庫県の中央に位置する北はりま地域は、中国山地の嶺南で長い歴史と豊かな文化を育んできたが、近年の高齢化、少子化等により、地域を取り巻く環境は厳しくなってきた。そこで、住民のもつ閉塞感を払拭し地域の魅力を再発見することで、自信を取り戻し地域の活性化を図ろうと、北はりま地域の1市4町（中町、加美町、八千代町、黒田庄町、西脇市）全体を屋根のない博物館に見立てて、数多く点在する地域の魅力（環境、行事、祭り、生活、産業、文化施設など）を、住民が自主的に活動する拠点（サテライト）としてNPO北はりま田園空間博物館に登録し、当博物館では様々な媒体を用いて、地域内外に情報発信を行うとともに、ツーリズムバスを仕立てるなど積極的な集客活動を行っている。

この博物館は平成14年9月にオープンした総合案内所を活動拠点として、120人のボランティア会員とサテライト、プログラム、特産品など各部会で組織される。現在サテライトの登録は209件、推計3,000人が関わっている。

この活動を契機に、地域外からの交流も盛んになり、これが刺激になって地域住民の活動が活発化し、特産品開発などの動きにも繋がっている。ここで開発された特産品や商品は、年間約128万人が訪れる道の駅を兼ねる総合案内所で販売され、その収益がこの事業を大きく支えている。

このように、地域住民、行政、NPOなどがうまく連動し、地域経済の活性化につながるアイデア豊かな活動である点が評価された。

特定非営利活動法人 北はりま田園空間博物館

<http://www.k-denku.com>

# オーライ！ニッポン大賞

どくていひえいりかつどうほうじん

すなはま び じゅつかん

## 特定非営利活動法人NPO砂浜美術館

こうちけん おおがたちょう  
高知県 大方町



Tシャツアート展の風景

### 講 評

「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です。」というコンセプトのもとに、それまで地域住民には当たり前のものではなかった長さ4kmの砂浜を世界でたった1つの美術館に見立てて、海からの漂流物、鳥の足跡、産卵にくるウミガメ、沖を泳ぐクジラなどを作品として捉えることで、自分達の地域にあるものを活用し、価値を生み出す活動を行っている。

この美術館では、平成元年に開催した「Tシャツアート展」をきっかけに、「らっきょうの花見」「漂流物展」など砂浜を舞台にユニークなイベントを開催し、年間3万人の人々が訪れている。特に今年で17回目を迎えた「Tシャツアート展」は、毎年1,000点を越える応募と、8,000人ほどの来場者が訪れる。また、町内の女性グループが廃校を宿泊施設として活用しており、このイベントのボランティアスタッフが滞在する間は、地域の女性達が宿泊・食事の世話をしている。この触れ合いはお互いの大きな感動となり、ボランティアスタッフが地域の魅力や感動を多くの人に伝えるなどPRに繋がっている。このように、「砂浜」の物の見方を変え、発想を豊かにすることで、自分の町に大きな価値を作り上げるこの活動は、大方町に年間約3万人という交流人口をもたらしており、地域住民と地域外からの住民が相互に関わり刺激することで地域が元気になる活動である点が評価された。

特定非営利活動法人NPO砂浜美術館 <http://www.sunabi.com/>